

五十音図でわかる動詞の分類と活用

趙 順 文*

摘 要

口語文法中有關動詞分類及活用乃完全承襲古典文法，在語言隨著時代的變化之下，其內容之矛盾不合理，已為語言學家教育學家所詬病。例如「未然形」有2種活用形式，「連用形」亦如此。「終止形」和「連體形」名稱雖異，卻共用1種活用形式。「假定形」和「命令形」亦有爭議。

本文針對以上諸缺失，站在1種名稱1種活用形式的合理化角度，以矩陣方式配合50音表，嘗試提出一套更有條理化的動詞活用理論。並且透過強烈視覺形像的「第Ⅱ類」動詞母音活用語尾「 $\frac{i}{e}$ 」的圖形作用，從助動詞的各種形態判斷出動詞的分類。

關鍵字 動詞分類・動詞活用・「 $\frac{i}{e}$ 」・50音表

1. はじめに

わたしは、動詞の分類と活用についてかつて小論1点を発表したのが、浅学非才のために不備なところがおおかった。本稿では前論をふまえて、視覚映像につよい図形を通じて学習者にわかりやすい動詞の分類と活用の方法を追求してみたい。

2. 伝統文法の再検討

周知のように、台湾で日本語学習者がおそわる動詞の分類と活用の内容は、伝統文法に

* 作者為本校東語系副教授

もとづくものがそのほとんどである。会話を担当する一部の教師のなかには自分なりの用法をとっているものもいるが、残念ながら、伝統文法と矛盾しているということから、学習者にはなかなかうけ入れられないようだ。そもそも、文法の授業では伝統文法、会話の授業では別方式のやりかたでは学生に混乱をもたらすのは必至であろう。抜本的対策としては、文法そのものをあたらしい角度から体系づけることがかんがえられる。もちろん、これを達成するにはチームワークによる研究がどうしても必要であるし、伝統文法のおおきなかべと対抗する覚悟をもっていなければならないが。

さて、伝統文法では動詞の分類と活用について五段・上一段・カ変・サ変の動詞分類と、未然形・連用形・終止形・連体形・假定形・命令形の動詞活用がきまっとりあげられる。

種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
五段	咲く	咲	-か -こ	-き -い	-く	-く	-け	-け
	継ぐ	継	-が -こ	-ぎ -い	-ぐ	-ぐ	-げ	-げ
	押す	押	-さ -そ	-し	-す	-す	-せ	-せ
	打つ	打	-た -と	-ち -っ	-つ	-つ	-て	-て
	思う	思	-わ -お	-い -っ	-う	-う	-え	-え
	呼ぶ	呼	-ば -ぼ	-び -ん	-ぶ	-ぶ	-べ	-べ
	住む	住	-ま -も	-み -ん	-む	-む	-め	-め
	散る	散	-ら -ろ	-り -っ	-る	-る	-れ	-れ
	死ぬ	死	-な -の	-に -ん	-ぬ	-ぬ	ね	-ね
	有る	有	-ら -ろ	-り -っ	-る	-る	-れ	-れ
	賦る	賦	-ら -ろ	-り -っ	-る	-る	-れ	-れ
	着る	着	き	き	きる	きる	きれ	-きろ -きよ
	似る	似	に	に	にる	にる	にれ	-にろ -によ

五十音図でわかる動詞の分類と活用

上一段	干る	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	-ひろ -ひよ
	見る	見	み	み	みる	みる	みれ	-みろ -みよ
	射る	射	い	い	いる	いる	いれ	-いろ -いよ
	居る	居	い	い	いる	いる	いれ	-いろ -いよ
	起きる	起	-き	-き	-きる	-きる	-きれ	-きろ -きよ
	過ぎる	過	-ぎ	-ぎ	-ぎる	-ぎる	-ぎれ	-ぎろ -ぎよ
	落ちる	落	-ち	-ち	-ちる	-ちる	-ちれ	-ちろ -ちよ
	恥じる	恥	-じ	-じ	-じる	-じる	-じれ	-じろ -じよ
	強いる	強	-い	-い	-いる	-いる	-いれ	-いろ -いよ
	減いる	減	-び	-び	-びる	-びる	-びれ	-びろ -びよ
報いる	報	-い	-い	-いる	-いる	-いれ	-いろ -いよ	
懲りる	懲	-り	-り	-りる	-りる	-りれ	-りろ -りよ	
下一段	得る	(得)	え	え	える	える	えれ	えろ えよ
	助ける	助	-け	-け	-ける	-ける	-けれ	-けろ -けよ
	上げる	上	-げ	-げ	-げる	-げる	-げれ	-げろ -げよ
	乗せる	乗	-せ	-せ	-せる	-せる	-せれ	-せろ -せよ
	交ぜる	交	-ぜ	-ぜ	-ぜる	-ぜる	-ぜれ	-ぜろ -ぜよ
	捨てる	捨	-て	-て	-てる	-てる	-てれ	-てろ -てよ
	撫でる	撫	-で	-で	-でる	-でる	-でれ	-でろ -でよ
	尋ねる	尋	-ね	-ね	-ねる	-ねる	-ねれ	-ねろ -ねよ
	教える	教	-え	-え	-える	-える	-えれ	-えろ -えよ
	並べる	並	-べ	-べ	-べる	-べる	-べれ	-べろ -べよ

国立政治大學學報第六十五期

	改める	改	-め	-め	-める	-める	-めれ	-めろ -めよ
	覚える	覚	-え	-え	-える	-える	-えれ	-えろ -えよ
	流れる	流	-れ	-れ	-れる	-れる	-れれ	-れろ -れよ
	植える	植	-え	-え	-える	-える	-えれ	-えろ -えよ
カ変	変る	(来)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ変	する	(す)	し・せ・る	し	する	する	すれ	しろ せよ
	論ずる	論	-じ	じ	-ずる	-ずる	すれ	-じろ -ぜよ

この表は、のちほど五十音図による配列を便利にするために、一般の辞書の巻末にのっている付録をすこし修正したものである。

これをみると、五段動詞にかぎっては、未然形と連用形は活用がそれぞれ2つずつあり、終止形と連体形、假定形と命令形の2ペアは名称のちがいきこあれ、それぞれ活用をおなじくするものであることにすぐきづくだろう。もっとも、上一段動詞と下一段動詞は假定形と命令形がべつべつの活用をとる点では5段動詞とややちがっているものの、いずれも伝統の文語文法につながりをもたせるところにはかわりはない。

ここでは問題点をはっきりさせるために、動詞活用のかなめとなる五段動詞「かく」を例にして、文語と口語との両文法の活用形式を比較してみよう。

	文語	口語
語 幹	か	か
未然形	-か	-か -こ
連用形	-き	-き -い
終止形	-く	-く
連体形	-く	-く
假定形	-け	-け
命令形	-け	-け

五十音図でわかる動詞の分類と活用

第一に、上掲の比較で明らかなのは、未然形と連用形に関しては、文語では分化しなかった活用の1つが口語では2つにかわってしまうことである。この矛盾点をいち早く打開するために、現代語の解釈を中心とした『新明解国語辞典』では文語の文法用語の文法用語を尊重しながら、五段動詞の形式に重点をおく分類をかかげている。たとえば、つぎのようである。

動詞活用表

活用の形	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段	第七段	第八段
種類	「ない・ぬ」に続く (未然形)	「う・よう」に続く (未然形)	文を中止したり、「ます」に続く (連用形)	「て・た」に続く (連用形)	文の終止などに用いられる (終止形)	おもに体言に続く (連体形)	「ば」に続いて仮定の意味を表わす (仮定形)	命令の意味を表わす (命令形)
五段活用 (四段活用ともいう)	ア	オ	イ	い(カ行) <イ音便> っ(タラワ行) <促音便> ん(ナバマ行) <撥音便>	ウ	ウ	エ	エ
上一段活用	イ		イ	イ・る	イ・る	イ・れ	イ・よ イ・ろ	
上一段活用	エ		エ	エ・る	エ・る	エ・る	エ・よ エ・ろ	
カ行変変活用	こ		き	くる	くる	くれ	こい	
サ行変変活用	し せ	し	し	する	する	すれ	せよ しろ	

五 段 活 用	第一段（未然形）	ア
	第二段（未然形）	オ
	第三段（連用形）	イ
	第四段（連用形）	<イ音便> <促音便> <撥音便>
	第五段（終止形）	ウ
	第六段（連体形）	ウ
	第七段（假定形）	エ
	第八段（命令形）	エ

もともと、五段活用という名称のもとに実際は八段活用の形式がつかわれていること自体には異和感をだれもおぼえずにはいられないし、また「五段」以外ときちんと対応できないので、この表を暗記するのがむずかしいことはだれのめにもあきらかだ。ただ、このような形式中心の分類は後述のようにおおきなヒントをあたえてくれるだろう。

第二に、終止形と連体形に即しては、文語と口語の活用は同一なのに、なぜちがう名称がつけられているのかという疑問がおこるが、それは、文語の「ラ変」「ナ変」「上二段」「下二段」「カ変」「サ変」などの動詞ではそれぞれことなるからである。たとえば、「ラ変」は「有り」、「ナ変」は「死ぬ」、「上二段」は「起く」、「下二段」は「立つ」、「カ変」は「来」、「サ変」は「す」を例にして、つぎの表を参照されたい。

語 例	有り	死ぬ	起く	立つ	来	す
語 幹	あ	し	お	た		
終止形	ーる	ーぬ	ーく	ーつ	ーく	ーす
連体形	ーる	ーぬる	ーくる	ーつる	ーくる	ーする

要するに、終止形と連体形とのかたちがそれぞれちがう文語の分類を口語ではそのまま沿用しているのである。しかし、もっぱら口語をつかう現在ではこのような区別は無意味

五十音図でわかる動詞の分類と活用

といわざるをえない。おなじことは口語の「五段」の仮定形と命令形にもあてはまる。

第三に、6頁の表より口語の「上一段」「下一段」「カ変」「サ変」における終止形と連体形、仮定形と命令形との2ペアがそれぞれ1つずつの活用形式に還元されることがわかる。

つまり、これらの終止形は「いる」「エる」「くる」「する」、仮定形は「イれ」「エれ」「くれ」「すれ」のように、いずれも語尾が「る」か「れ」のかたちによってしめくくられているのである。しかし、「五段」が助動詞「れる」「う」とくみあわされるように、「五段」以外は「られる」「よう」と対応しているということから、「五段」は助動詞「ば」、「五段」以外は「れば」のようなコンビネーションはもっと理にかなうものとおもわれる。つぎの表を参照されたい。もっとも、「サ変」は「れる」「よう」と接続するが、論理的にこのルールの成立となんらの矛盾はない。

種 類	活 用	助 動 詞
五 段	ア オ	れる, う
上 一 段	イ	られる, よう
下 一 段	エ	られる, よう
カ 変	こ	られる, よう
サ 変	さ, し	れる, よう

種 類	活 用	助 動 詞
五 段	エ	ば
上 一 段	イ	れば
下 一 段	エ	れば
カ 変	く	れば
サ 変	す	れば

したがって、従来の配列ではなく、「上一段」は「イ」、「下一段」は「エ」、「カ変」は「く」、「サ変」は「す」のように、助動詞「れば」と接続させれば、動詞活用表はもっとすっきりするだろう。

第四に、命令形の問題だが、事情がやや複雑になる。文語はともかくとして、口語では「五段」は命令形と仮定形の活用をおなじくするもので、べつべつに活用をたてる必要はないから、もっぱら常用の仮定形に属させる方がよい。実際、命令表現がなされる場合にはこの「命令形」のかたちというよりも、むしろ「連用形」、上述の八段活用の形式に即してこまかくいえば「連用形」第三段か第四段のほうがおおくもちいられているからである。

「上一段」と「下一段」はご覧のとおり、余計な「る」（注 一）を1つもたせる連体形と終止形をのぞいて、あとの活用はいずれも「上一段」は「イ」、「下一段」は「エ」でおわるので、実際の活用名称と関係なく、どこに配置させても所詮おなじことである。従来のやりかたでは独自の活用をそなえてあるが、「未然形」に合流したものとみなしてもよかる。実際「カ変」「サ変」には同一の解釈があてはまる。つまり、「カ変」は「こ」プラス「い」・「ない」、「サ変」は「し」プラス「ろ」・「ない」、「せ」プラス「よ」・「ず」のように命令形と未然形に即しては両者とも同様の活用だとかんがえても一向さしつかない。つまり、従来の命令形である「こい」は「こ」と「い」、「しろ」は「し」と「ろ」、「せよ」は「せ」と「よ」のように、活用と助動詞に分化したほうが適当であろう。そして「上一段」と「下一段」も「サ変」とおなじく、はなしことばでは「イ／エ」と「ろ」、かきことばでは「イ／エ」と「よ」というふうに解釈されよう。もちろん、この種の「ろ」と「よ」は命令表現の助動詞を意味するのである。

3. 50音図と対応できる6段形式の活用

上述したところを整理すると、つぎのような「五段」動詞の活用表がえられる。

五段動詞

	六段活用	従来の名称	活用語尾の母音	備考
五 段 動 詞	第一段	(未然形)	ア	
	第二段	(未然形)	オ	
	第三段	(連用形)	イ	
	第四段	(連用形)	<イ音便>、<促音便>、 <撥音便>	
	第五段	(終止形)	ウ	連体形同様
	第六段	(仮定形)	エ	命令形同様

注 一 実際「五段」動詞から派生した可能動詞は「エ」と助動詞「る」からなりたつものとみなしてもいい。

五十音図でわかる動詞の分類と活用

つまり、「五段」動詞といっても、実際には6つの活用形式をもっているのである。従来の伝統文法分類法は、形式と意味の配慮をもってなされたものとおもわれるが、形式がくずれているし、意味が学習者にわかりかねる現在では、伝統を尊重せよと一方的に判じがたい。「未然形」やら「連用形」やらつめこまれると、かえって文法がきれいになるものだ。実際日本語教育の世界で極特殊な一部をのぞいて、伝統文法一名学校文法はほとんどもちいられていない。ひにくなことに、この極特殊な一部には日本語学習者人口比率が世界に冠たるわが台湾がはいっている。つぎの表(注 二)を参照されたい。

伝統文法	日 本 語 教 育
五段動詞	五段動詞、動詞、子音動詞、第1類動詞
一段動詞	一段動詞、弱動詞、母音動詞、第2類動詞
カ行変格動詞	カ行変格動詞、不規則動詞、第3類動詞
サ行変格動詞	サ行変格動詞、不規則動詞、第3類動詞
未然形	未然形、推量形、派生形、ナイ形
連用形	連用形、語幹、マス形
連用形＋て	第二連用形、テ形
終止形、連体形	終止形、連体形、辞書形、基本形、原形
仮定形	仮定形
命令形	命令形

さまざまな用語がつかわれているのは伝統の文法用語に対する反発だからである。それはともかくとして、これらのあたらしい用語は意味より形式に重点がおかれているのが特徴であろう。つまり、「未然形」は「ナイ形」、「連用形」は「マス形」、「連用形＋て」は「テ形」、「終止形」「連体形」は「辞書形」「基本形」「原形」などによっておきか

注 二 たとえば『日本語教科書ガイド』(1983、国際交流基金編、北星堂)にでている動詞分類と活用の部分に関しては、伝統文法を無視して独自の方法をつかうのがほとんどである。

えられるのである。なかんずく「終止形」と「連体形」には、べつべつの名称ではなく、1つだけの名称があたられていることに注目されたい。これは、従来、「終止形」と「連体形」が合流すると、形容動詞における「終止形」と「連体形」との区別がなくなり、用言活用表の体系性をくずすおそれがあるので、どうしても伝統文法が必要だという擁護派への反論といえよう。受験勉強はともかくとして、形容動詞ないし形容詞の活用表を暗記する学習者はいったん何人いるものか。たとい、一時それができても、実践の場にまったくやくにたたないことは必至である。

かくて、だれでもおぼえやすくてわかりきった50音図と対応できるように、「五段」動詞の活用は「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」そして「音便形」の順に6段形式をとることがのぞましかろう。つぎの表をみられたい。

五段動詞

	6段形式	活用語尾の母音
五 段 動 詞	第1段	ア
	第2段	イ
	第3段	ウ
	第4段	エ
	第5段	オ
	第6段	<イ音便><促音便><撥音便>

この表をみると、「五段」動詞の活用は実際に6段形式をそなえることがわかる。軽声をふくめての5声がある中国のように、「五段」という名称がそのまま沿用されると、第6段の<音便形>は一種の軽声の機能をはたすものとみなしてもよかろう。そうでなければ、現在、おおくの研究者がつかっている「第Ⅰ類」動詞はそれにとってかわるがよい。小論では「第Ⅰ類」動詞は「五段」、「第Ⅱ類」動詞は「上一段」と「下一段」、「第Ⅲ類」動詞は「カ行変格」と「サ行変格」のかわりにつかうことにした。

一方、よりよい効果をおさめるためには「第Ⅰ類」動詞の活用を十分いかそうとくふう

五十音図でわかる動詞の分類と活用

した50音図はつぎのように修正されよう。

母音	か行	が行	さ行	ざ行	た行	だ行	な行	は行	ば行	ぱ行	ま行	や行	ら行	わ行	鼻音
あ	か	が	さ	ざ	た	だ	な	は	ば	ぱ	ま	や	ら	わ	ん
い	き	ぎ	し	じ	ち	ぢ	に	ひ	び	ぴ	み	ゆ	り	い	
う	く	ぐ	す	ず	つ	づ	ぬ	ふ	ぶ	ぷ	む	ゆ	る	う	
え	け	げ	せ	ぜ	て	で	ね	へ	べ	ぺ	め	よ	れ	え	
お	こ	ご	そ	ぞ	と	ど	の	ほ	ぼ	ぽ	も	よ	ろ	を	
	い	い	し		っ		ん		ん		ん		っ		

すなわち、学習者はこの50音図修正表をとおして、のちほど動詞のかなめとなる「第Ⅰ類」の活用を容易にマスターするのである。なお、「ガ行」は「い」、「ナ行」「バ行」「マ行」は「ん」というふうにならざるにわざと右肩に「ん」をつけてあるのは「て」「た」ではじまるものを後続させるときに、「て」「た」がそれぞれに異形態である「で」「だ」にかわることを意味することに注意されたい。

4 五十音図による動詞活用表の提言

やっかいな「第Ⅰ類」動詞の活用が解決されれば、「第Ⅱ類」動詞と「第Ⅲ類」動詞はさほど問題にならないだろう。つぎの活用表は五十音図によるこの3つの動詞をまとめてつくったものである。なお、「第Ⅲ類」の「V₁」は本来ならば「し」「せ」「さ」の3つの活用をもっているが、この表を暗誦しやすいように「し」に一本化することにした。

動詞活用表

第 I 類	V ₁	a かがさたなはまらわ……………ない、せる、れる、れる
	V ₂	i ききしちにびみりい……………たい、ます
	V ₃	u くぐすつぬぶむるう……………。
	V ₄	e けげそてねべめれえ……………ば、る、!
	V ₅	o こそせとのぼもろお……………う
	V ₆	i いいしっんぐんっ……………て、た
第 II 類	V ₁	$\frac{i}{e}$ ………………ない、させる、られる、ろ!
	V ₂	$\frac{i}{e}$ ………………たい、ます
	V ₃	$\frac{i}{e}$ る……………。
	V ₄	$\frac{i}{e}$ ………………れば
	V ₅	$\frac{i}{e}$ ………………よう
	V ₆	$\frac{i}{e}$ ………………て、た
第 III 類	V ₁	こ……………ない、させる、られる、い!
	V ₂	き……………たい、ます
	V ₃	くる……………。
	V ₄	く……………れば
	V ₅	こ……………よう
	V ₆	き……………て、た
	V ₁	し [さ] ………………ない、[せる] [れる]、ろ!
	V ₂	し……………たい、ます
	V ₃	する……………。
	V ₄	す……………れば
	V ₅	し……………よう
	V ₆	し……………て、た

五十音図でわかる動詞の分類と活用

つまり、「a」「i」「u」「e」「o」「i」はそれぞれ「V₁」「V₂」「V₃」「V₄」「V₅」「V₆」の活用語尾の母音をしめす。とくに「i」記号を<イ音便><促音便><撥音便>の音便形につかうのは、「イ」母音から分化したものの特徴を学習者にわかってもらえるように配慮がはったからである。

「ん」と「い」は助動詞「て」「た」ではなく、その異形態である「で」「だ」と接続することを意味する。

助動詞のコラムのうち、「V₃」たる「第Ⅰ類」は「u」、「第Ⅱ類」は「 \dot{i} る」、「第Ⅲ類」は「くる」「する」のように、いずれも「o」でしめくくられていることに注目されたい。命令表現に関しては、「第Ⅱ類」は、それぞれ「 \dot{i} ろ (=よ)」、「第Ⅲ類」は「こい」「しろ (=せよ)」によってなされている。もちろん「第Ⅰ類」は助動詞を付加するのではなく、活用語尾の「e」母音自体で表現される。

5 「第Ⅱ類」による動詞分類法

最後に動詞分類法について簡単にのべよう。周知のように、動詞の分類法といっても、「第Ⅲ類」は「くる」と「する」および「する」の合成語にかざられているから、実際には「第Ⅰ類」か「第Ⅱ類」かのいずれかの判断にほかならない。

前述した表をくわしくみれば、活用語尾の母音「 \dot{i} 」を基準とした「第Ⅱ類」による動詞分類法はもっとも簡単明瞭であろう。

「V₁」に即しては、助動詞「ない」「ろ/よ」「させる」「られる」とくみあわせる活用語尾の母音が「 \dot{i} 」ならば、「第Ⅱ類」に属するが、そうでなければ、「第Ⅰ類」と判断される。視覚映像をおもんじる図表をあらわすと、つぎのようになる。斜線は「第Ⅱ類」をしめす。

〔第Ⅱ類← $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←ない、ろ/よ、させる・られる〕

たとえば、「いない」は〔第Ⅱ類←i←ない〕、「あけろ」は〔第Ⅱ類←e←ろ〕、「たべられる」は〔第Ⅱ類←e←られる〕のようにいずれも「第Ⅱ類」と判断される。また「かえらない」は〔第Ⅰ類←非 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←ない〕、「いかせる」は〔第Ⅰ類←非 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←せる〕、

「よめ」は〔第Ⅰ類←非 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←。〕のように、どれをみても「第Ⅰ類」と判断できよう。もちろん助動詞「られる」「させる」は「第Ⅱ類」と、「れる」「せる」は「第Ⅰ類」ときちんと対応するから、容易に判断がくだせるだろう。ただ、「とられる」のような語は「と」「られる」か「とら」「れる」かの判断にまよう場合があるが、「第Ⅰ類←非 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←られる〕という推理が成立するので、やはり「第Ⅰ類」と適切に分類を判断しうる。しかし、「しらない」はともかくとして、「しられる」のように「し」「られる」か「しら」「れる」かのどちらがただしいのか選択にまよってしまう場合もある。この場合は結局例外として処理するしかない。最終的な結論は助動詞「ない」「ろ／よ」と活用語尾の母音 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ とのコンビネーションによるのがもっとも簡単明瞭だといわれる。

「V₂」に関しては、助動詞「たい」「ます」「ながら」などくみあわせる視覚映像たる活用語尾 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ に判断の基準がおかれる。この記号で、斜線がついているところは「第Ⅱ類」、斜線なし部分は「第Ⅰ類」と判断することを意味する。つまり、母音「e」でおわるものは斜線にぬりつぶされているから、すべて「第Ⅱ類」に属する。母音「i」については、わずかな斜線部分は「第Ⅱ類」、斜線なしの空白部分は「第Ⅰ類」に属する。実際のわずかな斜線部分はもともと、「上一段」に相当するもので、数が非常にすくないから、暗記すればよいだろう。たとえば、常用されているものはつぎの27語である。

あきる、あびる、いきる、いる、おきる、おちる、かえりみる、かりる、きる、こころみる、さびる、すぎる、そえる、たりる、つきる、できる、にる、のびる、ほろびる、みる、もちいる、えんじる、おうじる、かんじる、きんじる、しょうじる

また上述したところを、「V₁」にならって図表であらわすと、つぎのようになる。

〔第Ⅱ類← $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←たい、ます（注三）〕 ただし、空白部分は第Ⅰ類をしめす

「V₃」については、〔 $\begin{array}{|c|} \hline i \\ \hline e \\ \hline \end{array}$ ←る〕の判断基準が用いられる。「V₂」と同じく、斜線部分は

注 三 もちろん接続助詞「ながら」「そうだ（様態）」などもこの判断法にあてはまる。

五十音図でわかる動詞の分類と活用

「第Ⅱ類」に属するのに対し、わずかな空白部分は「第Ⅰ類」にはいる。この空白部分は数が微微たるもので、例外としておぼえればよい。たとえば、常用されているもののはつぎの27語である。

いる（注四）、うらぎる、あせる、おもいきる、かえる、かぎる、かじる、すべる、しる、しくじる、しげる、しめる、さえぎる、しゃべる、ちる、てる、にぎる、ねる、はいる、はしる、はりきる、ひねる、ふりかえる、へる、まいる、まじる、よみがえる

同様に前述のところを図示すれば、つぎのようになる。

〔第Ⅱ類←

i
e

←る〕　ただし、空白部分は第Ⅰ類をしめす

最後に「V₄」は〔第Ⅱ類←

i
e

←れば〕、「V₅」は〔第Ⅱ類←

i
e

←よう〕、「V₆」は〔第Ⅱ類←

i
e

←て、た〕のようにそれぞれ「V₃」、「V₁」、「V₂」のルールときちんと対応できることに注目されたい。もちろん、この場合についても、斜線部分は「第Ⅱ類」に、空白部分は「第Ⅰ類」に属する。

かくて、「第Ⅱ類」による動詞分類法は従来の類雑な分類法より簡単でわかりやすいから、合理的でかつ効果的であることはだれのめにもあきらかだろう。

つぎの表は、この節の結論として、まえにかかげてきた諸表をもう一度整理してつくったものである。

注 四 「要る」という表記をつかえば、もっとはっきりするだろう。「帰る」「湿る」も同様。

動詞の分類と活用

	活用語尾助動詞	要注意動詞
第 I 類	V ₁ らかがさたなばまわ……ない、せる、れる V ₂ りきぎしちにびみい……たい、ます V ₃ るくぐすつぬふむと……。 V ₄ れけげせてねべめえ……ば、る、! V ₅ らごそとのぼもお……う V ₆ っいいしんんぐっ……て、た	V ₃ 分類による第 I 類動詞 いる、うらぎる、あせる、おも いきる、かえる、かぎる、かじ る、すべる、しる、しくじる、 しげる、しめる、さえぎる、しゃ べる、ちる、てる、にぎる、ね る、はいる、はしる、はりきる、 ひねる、ふりかえる、へる、ま いる、まじる、よみがえる
第 II 類	V ₁ ……ない、させる、られる、ろ!(注 五) V ₂ ……たい、ます V ₃ る……。 V ₄ ……れば V ₅ ……よう V ₆ ……て、た	V ₂ 分類による第 II 類動詞 あきる、あびる、いきる、いる、 おちる、おりる、かえりみる、 かりる、きる、こころみる、さ びる、すぎる、そえる、たりる、 つきる、できる、にる、のびる、 ほろびる、みる、もちいる、え んじる、おうじる、かんじる、 きんじる、しょうじる
第 III 類	V ₁ こ……ない、させる、られる、い! V ₂ き……たい、ます V ₃ くる……。 V ₄ く……れば V ₅ こ……よう V ₆ き……て、た	
第 I 類	V ₁ し(注六) [さ]……ない、[せる]、[れる]、ろ! V ₂ し……たい、ます V ₃ する……。 V ₄ す……れば V ₅ し……よう V ₆ し……て、た	

注：(1)「き」に関しては、斜線のついている部分「第 II 類」、斜線なしの空白部分は「第 I 類」をそれぞれしめす。
 (2)「第 II 類」による分類法のルールからはみだした動詞は上表の通りである。
 (3)「第 III 類」については、「し」は「ない・ろ」、「せ」は「ず・よ」、「さ」は「れる」「せる」とそれぞれ対応するが、この「し」は「V₁」の 3 つの活用を代表させることにした。

注 五 かきことばでは「ろ」は「よ」によって置換される。

注 六 かきことばでは「しない」は「せず」、「しろ」は「せよ」によってそれぞれ置換される。

6 おわりに

「ます形」活用を中心にした「iます」「eます」「ieます」の分類法をわたしはかつて1点発表した。小論ではこれをふまえてもう1度動詞の分類と活用に挑戦してきた。五十音図によるあたらしいところみにはいままでの諸説にはない①1形式1活用②応用のきく五十音図修正表③視覚映像にうったえる「第Ⅱ類」動詞の図形分類法など——3つの特徴がある。従来、研究者のあいだには甲論乙駁で結論がでなかった動詞の分類と活用を実践上のたちばで解明したつもりだが、結局、不備なところもおおい。たとえば、「愛しない」よりも「愛さない」のほうがもっぱら常用されているなど。また、「第Ⅰ類」と「第Ⅱ類」にまたがる動詞と文語の関係も考察すべきであろう。これは今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 英 紹唐 1966「日本語動詞の形態から動詞の種類を判断する方法——初心者指導のために」『日本語教育8』16-38
- 2) 英 紹唐 1978『日文動詞用法理論與例示』台湾衆人出版社
- 3) Roy A. Miller 編 1975『ブロック日本語論考』研究社、林栄一（日本人）編訳
- 4) 森田富美子 1976「動詞分類に関する一考察」『国際学友会日本語学校紀要1』
- 5) 寺村 秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅰ・Ⅱ』くろしお出版
- 6) 趙 順文 1986「日本語動詞の活用及び分類法の一考察」『台北工專機械工程學刊23』
- 7) 近藤 達夫 1989「記述的統語論」『講座日本語と日本語教育11』明治書院

〔付記〕小稿は1989年5月1日に台湾日本語文研究会第1次例会で発表した「マトリックス法による動詞の分類と活用」を修正し、さらに改題して1991年6月2日に台湾日本語文研究会第23次例会に提出してまとめたものである。